

昔若かりし頃に一つの詩篇との出逢いがある。今にして思うと、それこそが私が精神分析へと誘われる端緒なのだ。19世紀のアメリカの詩人ウォルト・ホイットマンの「There Was A Child Went Forth」という抒情詩がそれで、日がな一日ほつき歩く男の子のお話で、かいつまんで言うと、家の納屋やら中庭、さらには沼地の畔、牧草地、穀物畑、果樹園、埠頭、それに街中へと彷徨い歩き、そしてその行く先々で「彼が見たもの、それが彼の一部分になった」というリフレインで各段落が括られている。それらの総て、彼の飢えた無垢なる眼に吸い込まれ彼の一部分になったものたちとは、勿論彼の父親そして母親をも含まれているわけだが、そこには伶俐かつ骨太な懐疑的精神の萌芽が窺われ、私はこの幼き見者ともいふべき‘知りたがりや’の男の子が大好きだった。「彼が見たもの、それが彼の一部分になった」というリフレインの弾んだ響きが私の深奥に幾度となく訝し、いつしかふと翳りを帯びてゆく。私は一体何を見、そしてそれら私の一部分になった何が、かくも‘厄介極まりない私’にしているのかと自問した。その当時、些か己自身を持て余し気味でいたのだろうが、その私の一部分になったものたちの行く末に自ら責任があると感じた。それを正しく見据える眼が欲しい、そう思い至った。

私が渡英したのは1972年初夏だが、その翌年秋以降タヴィストック・クリニックに trainee として籍を置いた。この3年余の pre-clinical の時代、つまり心理臨床に携わる前段階だが、私はイギリスの子どもたちに直接接触れる機会をかなり精力的に開拓していった。いずれ心理臨床の場で私が出会うであろう子どもたちがどこから来てどこへ戻ってゆくのか、つまり彼らの生活の実態を皆目知らないことの焦慮に駆り立てられてのことだった。「彼(彼女)が見たもの、それはその子の一部分になった」というそれらが私にはまるでチンプンカンプンなのではいい筈も無かろう。手始めに養護施設で一年ほど Assistant Houseparent として勤務したことを皮切りに、それ以降はフリーのオブザーバーの立場で、子どもの遊戯観察のため、実にさまざまな施設を訪れている。当時タヴィでは Shirley Hoxter が陣頭指揮を執り、Deprived Children プロジェクトを立ち上げたばかりで、その顛末書が1983年に出版され、我国でも今ようやく邦訳され我々の手元に届けられてあるわけだが。※※ そこにはかつて私の傍らにいた懐かしい面々の名前が居並ぶ。私の同期でごく親しかったアイルランド系の男性ノエルが当初からこのプロジェクトに参加しており、「Camden District Day Care Centre for the Deprived Children」の仕事に従事していたから、早速には彼から観察の機会を貰った。Deprivation とか Deprived Children とか当時タヴィ内では喧しく取り沙汰されていたコトバは私には観念以外のなにもでもなかった。そもそも‘剥奪’という日本語訳すらも意味を成さない。いみじくも邦訳の題名に、剥奪という耳慣れない言葉を使うのを避け、苦肉の策として敢えて Deprived Children を‘被虐待児’という言葉で代替

してあるのだが、やはりそれは違うだろう。そこで、かつて観念でしかなかったそのコトバが徐々に私のなかで実態を帯びるに至ったときに私が味わった身の凍りつくような衝撃について語ってみよう。その衝撃こそ、私の心理臨床家としての始まり、いうなれば‘火の洗礼 baptism of fire’のようなものであったのだから。

ここに茫漠として時空を超えて、まるで手招きしたら飛んできたというふうに、或る記憶が二つ、ふいと蘇った。その一つ、まずは‘眼の記憶’を話そう。或る朝のこと、私は友人ノエルの招きで彼の職場である Day Care Centre を訪れ、遊戯室で子どもらの来室を待っていた。そこへ母親が登場。小脇に抱きかかえた赤子を床に降ろすや、傍らのスタッフとごく気軽に朝の挨拶をして、彼女は姿を消した。何ら悪びれた風情でもなく、すべてが一見ごく日常的に映った。ところが、ふと私の足元に置き去りにされた赤子に眼を遣ると、生後3ヶ月ぐらいなのか貧相なクシャクシャした小さな顔をおくるみから覗かせていたが、その青い瞳が異様に痙攣しているのだ。焦点は結ばれず、いうなれば眼を白黒させて、まるで宙吊り状態。勿論声など発することもできず、すっかり固まっている。愕然として思った。ああ、これはウンチだ。あの母親はここに我が子をまるでウンチみたいにポットン落として行ったんだわと…。ウンチに目鼻立ちも毛頭ない。見つめられることがないから、眼が無い。聞かれることがないから、耳がない。語られることが無いから、口がない。感じられることがないから、皮膚を持つこともない。そして、なによりも名まえを呼ばれることがないから、名無しである。言い換えれば‘非存在’ nobody の謂い。

旧約聖書にこんなコトバがある。

「恐れるな、わたしはあなたを贖う。

あなたはわたしのもの。わたしはあなたの名を呼ぶ」(イザヤ書43:1)

名まえなど呼ばれることもない、従って贖われることのない、死の棘に刺し貫かれた、硬い痛いウンチは復讐する。まさに自爆テロのように。私が眼にした、この哀れな子どもの痙攣した眼の行く末を思い煩う暇など要らなかった。その場にその子の兄姉たちがぞろぞろいたから、いずれその子が遅かれ早かれそうなってゆくであろうイメージを直截的なかたちで提供していた。二人の兄たちはドラム缶に体当たりして、跳び箱のつもりかそれを跨ごうとして、凶暴さと無邪気さとの入り混じった血走った眼と不敵な笑いとで執拗に挑んでいた。時折の痣やかすり傷など屁でもない。一方、その姉なるひとは、男性スタッフの腕にぶらさがり、頻りに乱暴に振舞わされることを煽り、嬌声をあげていた。興奮の果てに疲労困憊したか、あるいはからだのどこかをぶつけたか、ヒステリックに泣き崩れるのが落ちだった。だが、それらすべてが‘悪魔祓い’の儀式なのだ。彼らのからだに沁みこんだ恐怖を振り払うことで、どうにか息継ぎをしていた。出口無しの恐怖の渦に巻き込まれ、溺れる、まさにその寸前に。

もう一つ、‘指の記憶’を語ろう。St.Thomas Day Hospital でのことだ。この病院はテムズ河沿いにあり、Deprived Family の通所施設だ。子どもたちの自由遊戯保育と並行して母親たちにもグループ作業療法がなされていた。彼女らは誰しも殊勝げにその和やかな雰囲気の中かでとりとめもないお喋りやらちょっとした手仕事などに勤しんでいた。毎回ランチ時には調理された給食が提供されていたから、食堂では子どもたちは大はしゃぎなのだった。日常彼らはまともに hot-meal なぞ口にしてないんだと聞いた。じゃあ何を食べているのかといえば、缶詰めの baked-beans (インゲン豆のトマトソース煮) だというから驚愕した。何回か通ううちに或る一人の小くて華奢な感じの女の子が私になつた。そこで毎回私が行くと、彼女が私の遊び相手となった。或る時、日当たりのいい中庭に出て、遊びに興じる他の子どもらに混じって、私たちは一緒に手を繋いで立っていた。からだか他の子らと衝突しそうなのを恐れて、私が「Come this way ! (こっちよ! )」と彼女に呼びかけ、庭の隅の方へ向けてからだを移動した。私の指先は彼女の指を軽く握っていた。2歩、3歩と足早に歩を進め、ふいと私の傍らにいないはずの彼女を眼で追うと、彼女がいなくなっている。驚き呆れ、振り返って彼女の姿を捜した。なんと、その女の子は私に握られていた指がすうっと抜け落ちたその瞬間、その地点に立ち竦んだままピクツとも動けずにいた。消え入りそうにしてうつむく彼女の眼は虚ろな穴でしかなかった。「オマエが手ヲ離シタ。オマエが悪インダ」と彼女を責めることもできよう。だが私は私自身を責めた、「ナゼ手ヲ離シタノカ?」と。私の指先に残る、その失われた指の虚の感触を確かめ、一瞬罪に慄いた。それからしばらくして遊びも時間切れとなり、彼女は母親に連れられて家路へと向かう。母親は腕に赤子を抱え、もう一方の空いた手でその女の子を握りしめ、引っ張ってゆく。実に意気揚々と晴れやかに。案外したたかで逞しいのではないかと、一瞬妙な違和感を覚え、もしかしてこれは罠かと訝った。知るか知らずか子どもは親の‘担保’にされている！そして女の子はバイバイ！と私の方に手を振り笑顔した。まるで‘生贄いけにえの仔牛’が引かれてゆくみたいなのに。沸々と怒りの涙が湧いた。

振り返って我が身を思うに、随分とかなりの歳月或るひとつの茫漠とした意識というか思い込みに囚われていたようだ。今更ながら口にするのも気恥ずかしいのだが、すなわちそれは「此の世で、人の親であることほど尊い悦ばしいことは無く、そして人の子であることほど嬉しくも幸せなことは無い」といった、実に素朴な思念、‘信仰’とも言っていいただろう。ところが精神分析家になるということは、フロイトを祖とする「エディプスの末裔」に列なるものである以上、私もまた一人の‘エディプス’として運命づけられ、そうした私のなかに培われた命綱ともいべき「家族神話」はいずれ打ち砕かれ、断たれるのが必然の道理であったから、フロイトのいうところの‘家族物語(ファミリー・ローマン)(1909)が総ざらいされる過程で、私はそれに抗うまさにも‘阿修羅の如き’ありさまであった。やがて家族はもはや聖域ではなく、罪なり悪をも孕む巢窟ともなり得ることを真に知ってゆくのだが、実に遅々たる目覚めであった。夢にも現にも人の心の熱情が醸し出す混迷と悔恨をぐり抜けることが必至であった。上記した二つの記憶、つまり Deprived Children との遭遇がその契機となり、後々の心理臨床という実践の場か

らも多くの示唆を得た。近代的自我とは、家族賛美を鼓吹する小児的ナルシズムを脱却せんとして、帰依と離反、憧憬と侮蔑など、数多の相剋に身を置いてこそ掴み取られるものであり、精神分析とはまさにそうした‘苦しみの炉’（イザヤ書 48:10）なのだ。そこでは非存在 nobody から実在 somebody へと飛翔すべく、真の自己蘇生が、つまりは自らを請け合う‘贖い’の力が涵養されていく。畢竟 Deprived Children とは、親の軛くびきにつながれた‘非存在を生きる子どもたち’なのだとは私は考えている。非存在という烙印 stigma が払拭されるかどうか、それはひとえに個々人の名が呼ばれることに懸かっている。セラピイの場とは元来そうした意味での潜勢的可能態なのだ。それから個々の身に纏う殻ともいえる‘家族物語（ファミリー・ローマン）’が練り直され、さらには脱皮を重ねてゆく。すなわち‘家族物語’こそが彼らの存在の基底なことから、それがたとえ底無し沼が点在する荒れ野の如く、ズブズブの危うさと脆さであろうとも、まずはそこに開拓の鋤入れが求められる。自らの手で自らを贖うために。そうであるためにも「精神分析」を擁護する我々セラピストたちが真正の‘贖いびと’となるのが試される。彼らの自己蘇生に果たしてどれほど手を添えることができるものか。そうした‘願’を心秘かに燃やし続ける者であるとき、私たちは Deprived Children との契りちぎをともに生き抜くことができるのではなからうか。タヴィストックから届けられた書は、そうした証しとして、つまりはセラピスト共々に‘Deprived Children’すなわち「非存在の子どもたち」の実存的闘いの書として読まれるべきものであらうと思われる。

今私の傍らには、ウォルト・ホイットマンの詩集『草の葉』がある。そこには「彼が見たもの、それが彼の一部になった」それらが、もはや彼の過去に留まらず、彼の現在ともそして彼の未来としても生きて耐え抜いた、その証しが我々に示されている。‘贖いびと’とはどれだけ‘己自身の未来のかたち’を夢見ることができるのかに懸かっているだから、彼の詩人からの「生きよ！」と呼び掛ける声に希望を聴こう、と私は思う。我が内なる非存在すなわち‘Deprived Children’の覚醒のためにも。。

※ 未公開の原稿。2007年の夏京都で開催された『京都心理療法セミナー』に講演者として招かれ、その席で読み上げた文章を一部加筆修正したもの。

※※「Psychotherapy With Severely Deprived Children」

M.Boston & R.Szur 編著

（「被虐待児の精神分析的な心理療法—タヴィストック・クリニックのアプローチ」

平井正三・鶴飼奈津子・西村富士子監訳 金剛出版 2006）